

「社会人として活躍する準備状況の自己点検票」の開発

清水 強志ⁱ 関田 一彦ⁱⁱ

ⁱ 創価大学 通信教育部 准教授 ⁱⁱ 創価大学 教職大学院 教授

1. はじめに

本学では、2014年度から開始した AP 事業の一環として、本学出身者（以下、「卒業生」と表記）の就職先企業の人事担当者を対象に、卒業生の職場適応（活躍状態）に関する聞き取り調査を行っている。これは、卒業生が本学で得た学修成果の一端を明らかにし、翻って本学の教育課程改善の参考にするためである。この調査の過程で、社会（企業）が卒業生に期待する資質・能力あるいは態度が整理され、いくつかの共通点が見いだされた。そこで、そうした資質や態度の修得状態を在学中に自己点検するためのツールとして、「社会人として活躍する準備状況の自己点検票（self-assessment of students' Readiness for becoming Competent Workers 以下、略して RCW）」の開発を2016年度から行ってきた（平成28年度大学教育再生加速プログラム報告書 pp. 20-25参照）。本稿は、その開発の最終報告である。

2. RCW 開発の概要

2-1. 目的

RCW の開発目的は3つある。まず、1) 自己点検によって、学生に自身の強みや弱み（汎用的能力の身につけ方）を自覚させ、残された

大学生活をその増進や強化のために有効に使うことを促し、2) 自己成長に必要な情報や知識について意識させ、必要な取り組みを促すためである。そして、3) 学部としてカリキュラム点検を行う際に用いる指標づくりである。

2-2. 調査方法

2017年1月にパイロットスタディとして、教育学部3年生向けの「キャリアビジョン I」および全学対象の「トップが語る現代経営」受講者の内の3年生以上を対象に、RCW 試作版を実施した。詳細は平成28年度大学教育再生加速プログラム報告書に譲るが、114名の回答を基に、回答の分散など調査票の妥当性を検討した。そして、2017年5月に、現状のスキル・態度の実態把握および RCW を完成させる目的で、経済、法学、経営、教育、国際教養、理工の6学部 に在籍する3,4年生（過年度生含む）を対象に、本調査を実施した（回答者6学部合計1,008人）。本稿では、調査データに関して性別、学年、学部による比較を行い、本学3・4年次におけるスキル認識状況について検討する。

2-3. 項目概要

RCW は、12のスキル・態度の取得に関する質問（Q1）と10のスキルに対する重要度を尋ねる質問（Q2）の2つから構成されている（表1参照）。具体的には、Q1は次のリード

表1 Q1の項目一覧

1. 年齢や性別、時には国籍が異なる人たちと、きちんと意見交換や意思疎通ができる
2. 都合の悪いことでも誠実に対応する（誤魔化さない、責任転嫁しない）
3. 残業や休日出勤をしなくて済むように時間を効率よく使い、効果的な仕事をする
4. 失敗したときや誤った行動をしたときは、素直に「すみません」と言える
5. 長期的な視野に立ちつつ（理想や夢は忘れず）、まずは目の前のやるべき仕事に集中して結果を出す
6. 一度引き受けたことは、責任を持って、あきらめずに最後までやり切る
7. 不明な点はその場で確認し、計画に沿って（約束を守って）取り組み、課題を先延ばししない
8. 周囲（上司、同僚、時にはお客様）を巻き込みながら仕事を進める
9. 自分の予想と異なる仕事や課題、あるいは状況でも、工夫をして（柔軟に対応し）結果を出す
10. 論理的に、あるいは多面的に、最後まで突き詰めて考える（考え抜く）
11. ポイントを絞って、相手に分かるように明快に（納得してもらえるように）話す
12. 専門知識の習得や資格取得など、自身のスキルアップに向けて意欲的に（自主的に）勉強する

文のあとに、「1. 意思疎通」、「2. 誠実に対応する」、「3. 効果的に仕事」、「4. 素直にあやまれる」、「5. 長期的視野と集中」、「6. 最後まで責任を負う」、「7. 計画的に取り組み先延ばししない」、「8. 周囲を巻き込み仕事」、「9. 工夫して結果」、「10. 論理的・多面的な思考」、「11. 明快に話す」、「12. スキルアップの勉強」に関して、6件法で程度選択を求めている。

【リード文】

本学の卒業生を対象にしたアンケート調査や就職先の上司への聞き取り調査をもとに、卒業生に対して社会が期待している事柄を整理しました。以下はその主なものです。あなたは卒業までにどの程度、そうした期待に応えられる人間に成長できそうですか（できましたか）？あなたの感覚に最も近い数字を選び○を付けてください。

【回答選択肢】

5. 既に応えられていると思う、4. 卒業までには十分応えられるようになると思う、3. たぶん応えられるようになると思う、2. 応えられるようになる自信がない、1. 応えられるようになる気がしない、0. 応えたくない

Q2は「あなたは社会人になるために、どのような能力や経験を重視していますか？以下の項目について、重視している度合いに近い数字に○を付けてください」とのリード文の後、

「1. 論理的思考力」、「2. 数理的処理能力」、「3. 課題発見力」、「4. リーダーシップ」、「5. 語学力」、「6. 文章力」、「7. 一人で困難に立ち向かう経験」、「8. 社会に貢献する自分力（強み、専門性）」、「9. 企業研究（自分が進む分野の徹底した情報収集）」、「10. 他流試合（他大生との交流・競い合い）」について尋ねている。回答は、5. とても重視している、4. 重視している、3. 多少は重視している、2. あまり重視していない、1. 重視していない、0. 考えたこともないという6段階の程度選択である。また、追問として、それらの能力の磨き方あるいは経験の積み方を知っているかどうかを「はい／いいえ」の二択で訊いている。なお、Q2は各スキルにおける重要度およびその修得方法の認知に関する自己判断を促すものであり、実際のスキル修得レベルを尋ねているわけではない。

3. 調査結果

3-1. 基礎集計および簡易な分析

本学の3年生以上で、「既に応えられている」との回答が目立って多かったのは、「4. 素直にあやまれる」(69.9%)、「6. 最後まで責任を負う」(43.3%)の2つの態度である。卒業までには応えられるようになると思っている者を含めると、前者は92.3%、後者は81.9%となる。また、「2. 誠実に対応する (28.8%)」についても、卒

業までに身につくと思っている者を合わせると74.7%の学生が誤魔化さず誠実な対応ができると考えている。素直で責任感があり、誠実に対応する姿勢は、聞き取り調査を通じて企業が創大生の魅力として挙げるものと一致している。

一方、「9.工夫して結果」と「11.明快に話す」に関して、既に応えられる（言い換えると、そうした能力を身につけている）と答えた学生は1割程度しかおらず（順に10.3%、11.1%）、応えられそうにない考える学生（自信がない、応えられる気がしない、合わせて）の割合（順に9.1%、12.9%）と拮抗している。

このほか、卒業までに応えられるようになる見込みを含めても50%前後にとどまるものが7項目あった。順にあげると、「1.意思疎通（51.6%）」「3.効果的に仕事（50.8%）」「7.計画的に取り組み先延ばししない（56.1%）」「8.周囲を巻き込み仕事（50.0%）」「9.工夫して結果（52.3%）」「10.論理的・多面的な思考（49.7%）」「11.明快に話す（49.4%）」（図1）である。企業や社会が求める態度や汎用的能力を具体的に意識することで、改めて学生生活で取り組むべき自身の課題に学生自身が気づくことができれば、こうした質問に答えさせることも有益であろう。

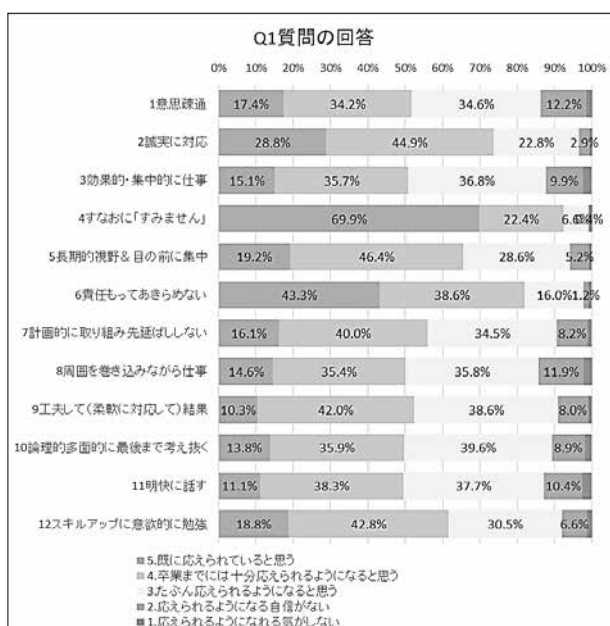


図1 Q1(12項目)の回答割合

汎用的能力や成長体験に対する重要性の認識度についてみると（図2）、もっとも重視している項目としては、「1.論理的思考力（79.2%）」、「3.課題発見力（78.4%）」、「8.社会的貢献（83.3%）」の3項目が挙げられ、「とても重視している」「重視している」の回答を合わせると8割前後の学生が重要視していた。他にも、「4.リーダーシップ」、「6.文章力」、「7.困難に立ち向かう経験」、「8.社会貢献力」が7割以上の学生から重視されている。

一方、「2.数理的処理能力（51.1%）」、「5.語学力（56.9%）」、「9.企業研究（57.8%）」、「10.他流試合（41.0%）」は、学生の間で比較的重要度が低いことが窺える。ただし、他大学の学生との交流を含む「他流試合」の機会の中に、クラブ活動におけるコンクールやリーグ戦などを含めて考えるかどうかで、この項目への回答割合は変わるかもしれない。知的能力に関する項目が並んでいるため、他流試合のイメージがわからなかった可能性がある。

一方、この結果から気になるのは数理的処理能力と語学力を重視しない学生が15%前後いることである。スーパーグローバル大学創成支援事業に取り組む本学において、語学力を重視しない学生の割合が、たとえば文章力を重視し

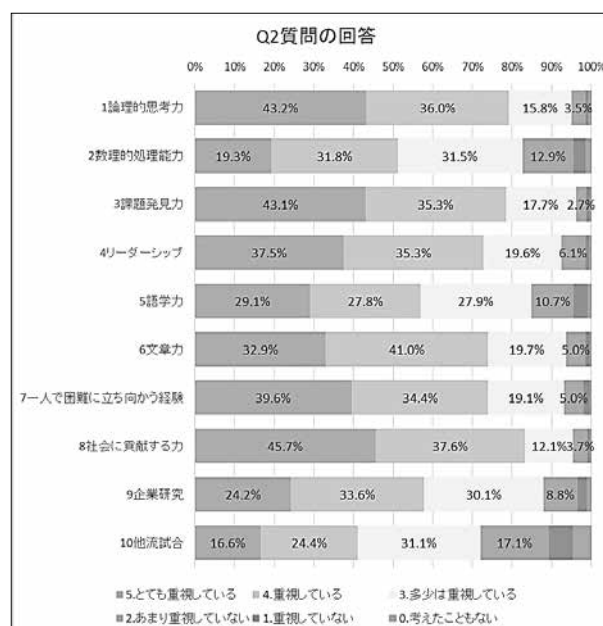


図2 Q2(10項目)の回答割合

ない学生の倍以上になっている点は注視しておきたい。また、創価コアプログラムで数理系科目を必修化し、数理的能力の重要性・必要性を初年次段階から喚起していることを考えると、数理的处理能力を重視する学生がもう少し多くても良からう。

重要視の程度を明らかにしたところで、追問として、その能力や経験を得たり伸ばしたりする方法（以下、修得方法と略す）を知っているかどうかを尋ねた。まず、10の能力・経験の修得方法を認知している割合を図3に示す。認知している学生の割合がもっとも高かったのは、「5. 語学力」であった（86.0%）。上述のように、語学プログラムの拡充に努める本学において、その修得方法の認知が高いのは当然であるが、なお14%の学生が知らないと答えている。推察だが、様々な学習機会を通じて挑戦してきたものの十分に成果を得られずに、自分に適した修得方法が未だ分からない状態の学生たちなのかもしれない。

次に重要視の割合が高かった項目として、「4. リーダーシップ」、「6. 文章力」、「7. 一人で困難に立ち向かう経験」の3項目が挙げられる。これらは7割前後の学生が、その修得方法を知っていると回答している。文章力向上・修得に関しては学術文章作法Ⅰが1年次必修になっており、学術文章作法Ⅱ,Ⅲそしてライティングセンターなど、正課内外で文章力を伸

ばす授業や機会が提供されていることは周知と思われる。そうしたことを考え合わせると、未だ3割の学生が修得方法について分からないと回答している点は注視しておきたい。

もう一つ興味深いのは、困難に立ち向かう経験を得たり、リーダーシップを伸ばす方法について7割の学生が知っていると回答している点である。どのような経験や能力なのか、ある程度イメージがないと判断できない間いだと思われるが、本学の学生はそうしたイメージを持っているのだろうか。

ここでさらに、その修得が重要と思っているにも関わらず、修得方法がわからないと回答した学生に注目した（図4）。もっともその割合が高かった項目は、「3. 課題発見」（40.2%）であるが、「1. 論理的思考」、「8. 社会貢献」、「9. 企業研究」、「10. 他流試合」も約3人に1人が知らないと回答している。また、「2. 数理的处理能力」、「6. 文章力」は初年次教育のなかで重視される項目であるが、約4人に1人がスキルの上げ方がわからないと回答している。

なお、「知っている／わからない」のグループで重要度の平均に差があるかt検定を行ったところ、すべての項目において1%水準において有意差が確認された。言い換えると、その能力や経験を習得する方法が分からない学生の多くは、当該の能力や経験を重要視していないということである。

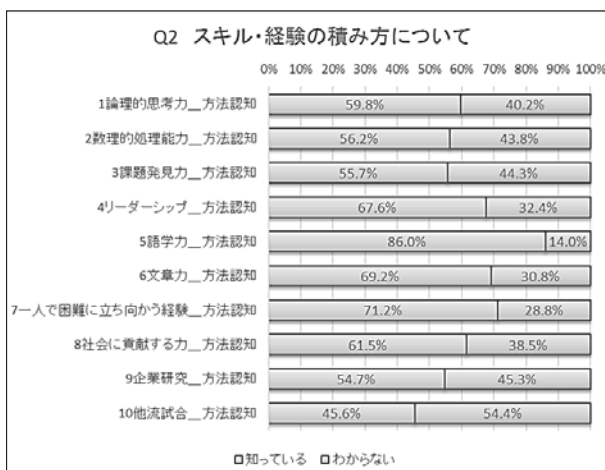


図3 Q2 能力・経験の積み方認知

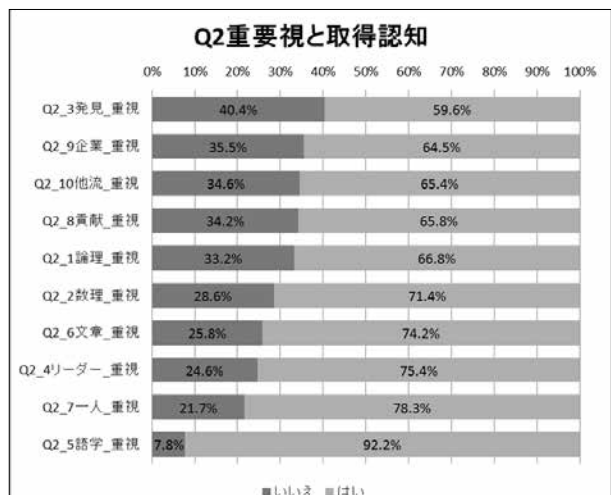


図4 Q2の項目重要視と修得方法認知の割合

3-2. 属性による比較分析¹ (性別、学年、学部)

(1) Q1における性差の有無

まず、Q1に関して性別による比較を行う。
t検定をした結果、1%水準で有意差がみられたものは、「10.論理的・多面的な思考」(男性平均値>女性平均値)と「11.明快に話す」(男性平均値>女性平均値)の2項目であり、5%水準で有意差が見られたのは「3.効果的に仕事」(男性平均値>女性平均値)の1項目であった(表2)。

女子学生より男子学生の方が、こうした能力の修得に自信があるのかもしれない。ただし、有意傾向(p=.057)ではあるが、「6.最後まで責任を負う」姿勢は、女子学生の方が身につけている。

(2) 学年による違い

次に、4年生以上(13・14年度生)と3年生(15年度生)における差異を比較するためにt検定を行った(表3参照)。結果、1%水準で有意差が確認されたのは、「2.誠実に対応する」(4年生平均値>3年生平均値)、「9.工夫して結果」(4年生平均値>3年生平均値)の2項目であり、5%水準で有意差が見られたのは「8.周囲を巻き込み仕事」(4年生平均値>3年生平均値)であった。また、有意傾向として(p=.061)、「5.長期的視野と集中」も4年生以上の方が高かった。本調査は、就職活動など進路に関する意識が高まり、社会人としての具体的なイメージが形成されてくる5月に実施している。もし、そうした意識の高まりが社会人としての心理的準備に反映すると仮定すると、4

表2 性別とQ1の平均値の比較

	t 値	自由度	有意確率 (両側)	男性 平均値	男性SD	女性 平均値	女性SD	平均値 の差
1.意思疎通	1.314	999	.189	3.57	.993	3.49	.927	.081
2.誠実に対応	-.174	966.0	.862	3.98	.871	3.99	.780	-.009
3.効果的・集中的に仕事	2.447	1001	.015	3.57	.952	3.43	.947	.148
4.すなおに「すみません」	-1.368	984.9	.172	4.58	.737	4.64	.621	-.059
5.長期的視野&目の前に集中	.642	1001	.521	3.79	.863	3.76	.820	.035
6.責任をもってあきらめない	-1.903	1002	.057	4.18	.879	4.28	.768	-.101
7.計画的に取り組み先延ばししない	-1.380	1002	.168	3.58	.917	3.66	.875	-.079
8.周囲を巻き込みながら仕事	1.247	960.9	.213	3.51	1.003	3.44	.906	.076
9.工夫して(柔軟に対応して)結果	1.811	1001	.071	3.57	.847	3.47	.782	.095
10.論理的・多面的に最後まで考え抜く	3.988	968.3	.000	3.60	.948	3.38	.842	.226
11.明快に話す	3.320	967.1	.001	3.53	.957	3.34	.855	.191
12.スキルアップに意欲的に勉強	.028	971.5	.978	3.71	.942	3.71	.831	.002

表3 4年生と3年生におけるQ1平均値の比較

	t 値	自由度	有意確率 (両側)	13/14年度 生平均値	13/14年度 生SD	15年度生 平均値	15年度生SD	平均値の差
1.意思疎通	1.283	989	.200	3.59	1.010	3.51	.938	.082
2.誠実に対応	2.929	991	.003	4.08	.845	3.92	.823	.161
3.効果的・集中的に仕事	.180	991	.857	3.52	.966	3.51	.942	.011
4.すなおに「すみません」	1.277	992	.202	4.64	.660	4.59	.709	.058
5.長期的視野&目の前に集中	1.872	991	.061	3.85	.896	3.75	.799	.103
6.責任をもってあきらめない	1.310	706.4	.191	4.27	.867	4.20	.804	.073
7.計画的に取り組み先延ばししない	1.420	992	.156	3.67	.914	3.59	.891	.084
8.周囲を巻き込みながら仕事	2.407	990	.016	3.57	.994	3.42	.940	.152
9.工夫して(柔軟に対応して)結果	2.805	668.3	.005	3.63	.892	3.47	.777	.158
10.論理的・多面的に最後まで考え抜く	.214	687.1	.831	3.51	.975	3.50	.878	.013
11.明快に話す	.657	992	.511	3.48	.915	3.44	.928	.040
12.スキルアップに意欲的に勉強	.723	992	.470	3.74	.893	3.70	.893	.043

注1 平均値のみの差を比較することは統計的には無意味であるが、各グループが等分散でないため、分散分析が使えなかった。そのため、本稿では、表2において標準偏差も明記した。また、これ以降においても平均値の比較を行う場合には、同様とする。

年生以上の方が、すべての項目でスコアが高くなると思われるが、実際に有意な差が認められた項目は限られていた。したがって、単に学年が上げれば社会人としての準備が進むとは限らないと言えそうである。

(3) 学部比較

学部による平均値の違いを確認したところ、各学部の個性が現れていた（表4）。結果、「1. 意思疎通」、「10. 論理的・多面的な思考」、「11. 明快到話」、「12. スキルアップの勉強」の項目において、国際教養学部の平均値が高かった。一方、その他の8項目に関しては、経営学部の平均値が高かった。修得見通しに関するこうした学部間の違いが、それぞれのカリキュラム（それを通じた学習体験）によっているとすれば、学習経験を左右する授業設計を工夫することでスコアの上昇が期待できるかもしれない。

ここで学部間の違いをさらに探索する目的で、これら12項目について「既に修得している」、「修得できそうである」、「修得できそうにない」という3レベルにまとめ、 χ^2 検定を行った。その結果、「6. 最後まで責任を負う」（ $p<.01$ ）、「9. 工夫して結果を出す」（ $p<.01$ ）、「10. 論理的・多面的な思考」（ $p<.05$ ）の3項目に学部間の有意な違いが認められた。以下、その3項目について学部と3レベルのクロス集計の結果を示す。

「6. 最後まで責任を負う」では、既にそうした態度を修得していると回答した学生は経営学部が多い（53.8%）。一方で、経済学部と法学部の学生が少ない（前者37.6%、後者38.0%）が、学部を問わず大半の学生は、卒業までには当該の態度を身につける見通しを持っている。あえて挙げれば、理工学部の学生で修得見込みなしと回答した学生の割合が4.7%と、他の学部に比べて高い（表5）。

また、「9. 工夫して結果を出す」能力については、既に修得しているとの回答が経営学部と理工学部の学生において多い（前者21.2%、後者15.0%）。なかなか修得が難しい能力と思われるが、大半の学部では修得見込みありとの回答と合わせると、9割を超える学生が修得に自信を持っているようである。一方で、法学部（12.1%）と教育学部（10.9%）の1割以上が修得することに困難を感じているようである（表6）。

「10. 論理的・多面的な思考」においては、見込みなしとの回答が経営学部でもっとも多く（17.5%）、教育学部が続いている（13.6%）（表7）。論理的・多面的思考力の育成は、共通教育の学習目標の一つであり、そうした能力を身につける見通しが無い学生が1割を超えている事態は看過できない。学士課程教育のカリキュラムとして、何が課題なのか検討が必要と思われる。

表4 学部ごとQ1の平均値と標準偏差

		1意思疎通	2誠実に対応	3効果的・集中的に仕事	4すなおに「すみません」	5長期的視野&目の前に集中	6責任をもってあきらめない	7計画的に取り組み先延ばししない	8周囲を巻き込みながら仕事	9工夫して（柔軟に対応して）結果	10論理的・多面的に最後まで考え抜く	11明快到話	12スキルアップに意欲的に勉強
1. 経済学部	度数	178	178	178	178	178	178	178	178	178	178	178	178
	平均値	3.55	4.02	3.58	4.63	3.74	4.22	3.69	3.44	3.52	3.53	3.51	3.74
	標準偏差	0.88	0.84	0.89	0.72	0.78	0.70	0.86	0.89	0.69	0.83	0.92	0.92
2. 経営学部	度数	104	104	103	104	104	104	104	104	104	103	104	104
	平均値	3.70	4.12	3.71	4.71	3.87	4.34	3.74	3.67	3.70	3.41	3.49	3.72
	標準偏差	0.96	0.82	0.96	0.57	0.84	0.82	0.97	0.96	0.90	0.96	0.95	0.93
3. 法学部	度数	173	172	173	173	173	173	173	173	173	172	173	173
	平均値	3.49	3.85	3.51	4.58	3.70	4.09	3.49	3.34	3.41	3.51	3.31	3.79
	標準偏差	0.95	0.89	1.01	0.69	0.88	0.91	0.91	0.99	0.82	0.93	0.99	0.96
5. 教育学部	度数	265	266	266	266	265	266	266	266	265	266	266	266
	平均値	3.46	3.98	3.41	4.58	3.83	4.29	3.62	3.59	3.47	3.39	3.44	3.67
	標準偏差	0.99	0.79	0.97	0.65	0.81	0.75	0.86	0.94	0.83	0.94	0.88	0.82
6. 国際教養学部	度数	53	54	54	54	54	54	54	53	54	54	54	54
	平均値	4.04	3.98	3.61	4.61	3.65	4.28	3.72	3.62	3.52	3.65	3.67	3.83
	標準偏差	0.94	0.81	0.92	0.81	0.78	0.76	0.96	0.95	0.77	0.83	0.75	0.80
7. 理工学部	度数	232	233	233	233	233	233	233	232	233	233	233	233
	平均値	3.47	4.00	3.46	4.60	3.81	4.16	3.56	3.37	3.61	3.64	3.45	3.63
	標準偏差	1.00	0.83	0.93	0.73	0.92	0.97	0.90	1.00	0.87	0.90	0.93	0.92
合計	度数	1005	1007	1007	1008	1007	1008	1008	1008	1007	1006	1008	1008
	平均値	3.54	3.98	3.51	4.61	3.78	4.22	3.61	3.48	3.53	3.51	3.45	3.71
	標準偏差	0.97	0.83	0.95	0.69	0.84	0.83	0.90	0.96	0.82	0.91	0.92	0.90

表5 学部と項目「6.最後まで責任を負う」修得見込みのクロス集計表

質問6階級	既に修得	修得見込みあり	修得見込みなし	合計
1. 経済学部	67	110	1	178
	37.6%	61.8%	.6%	100.0%
2. 経営学部	56	46	2	104
	53.8%	44.2%	1.9%	100.0%
3. 法学部	65	103	3	171
	38.0%	60.2%	1.8%	100.0%
5. 教育学部	121	143	2	266
	45.5%	53.8%	.8%	100.0%
6. 国際教養学部	24	29	1	54
	44.4%	53.7%	1.9%	100.0%
7. 理工学部	103	119	11	233
	44.2%	51.1%	4.7%	100.0%
合計	436	550	20	1006
	43.3%	54.7%	2.0%	100.0%

表6 学部と項目「9.工夫して結果をだす」能力の修得見込みのクロス集計表

質問9階級	既に修得	修得見込みあり	修得見込みなし	合計
1. 経済学部	8	158	12	178
	4.5%	88.8%	6.7%	100.0%
2. 経営学部	22	75	7	104
	21.2%	72.1%	6.7%	100.0%
3. 法学部	12	140	21	173
	6.9%	80.9%	12.1%	100.0%
5. 教育学部	23	213	29	265
	8.7%	80.4%	10.9%	100.0%
6. 国際教養学部	4	45	5	54
	7.4%	83.3%	9.3%	100.0%
7. 理工学部	35	181	17	233
	15.0%	77.7%	7.3%	100.0%
合計	104	812	91	1007
	10.3%	80.6%	9.0%	100.0%

表7 学部と「10.論理的多面的な思考」取得状況のクロス集計表

質問10階級	既に取得	取得見込みあり	取得見込みなし	合計
1. 経済学部	21	141	16	178
	11.8%	79.2%	9.0%	100.0%
2. 経営学部	15	70	18	103
	14.6%	68.0%	17.5%	100.0%
3. 法学部	24	133	13	170
	14.1%	78.2%	7.6%	100.0%
5. 教育学部	29	200	36	265
	10.9%	75.5%	13.6%	100.0%
6. 国際教養学部	6	44	4	54
	11.1%	81.5%	7.4%	100.0%
7. 理工学部	44	171	18	233
	18.9%	73.4%	7.7%	100.0%
合計	139	759	105	1003
	13.9%	75.7%	10.5%	100.0%

(4) Q2 重要度について

まず、性別の違いを確認する（表8）。t検定を行った結果、男子学生は女子学生に比べ、「2. 数理的処理能力」、「3. 課題発見力」、および「6. リーダーシップ」(p=.064)、を重視する傾向がある。一方、女子学生は男子学生に比べ、「5. 語学力」、「7. 一人で困難に立ち向かう経験」、「9. 企業研究」を重視する傾向が窺えた。重要視するものが異なれば、同じ学習体験やプログラムであっても、そこから得るものは異なるかもしれない。あるいは、同じ学習課題であっても、それに対する意義付けが男子と女子では異なり、取り組む意欲にも影響があるかもしれない。

次に、4年生（13・14年度生）と3年生（15年度生）における差異を比較するためにt検定を行った。結果、3年生は4年生に比べ、「5. 語学力」、「6. 文章力」、「10. 他流試合」の3項目でその平均が有意に高かった（表9）。4年になると語学力や文章力を磨こうとする意志や、他大生と交流して刺激を受けようという意欲は低くなってしまいうのである。「今さら」という諦めにも似た気持ちが起きやすいのかもしれない。スーパードグローバル事業など、3年次までの関わりが勝負になりそうである。

続いて、学部による平均値の違いを確認すると、各スキル・能力においてもっともスコアの高かった学部は以下の通りである（表10）。すなわち、「1. 論理的思考力」は国際教養学部（平

表8 性別とQ2の平均値と標準偏差

	t 値	自由度	有意確率 (両側)	男性 平均値	男性SD	女性 平均値	女性SD	平均値 の差
1. 論理的思考力	1.569	1000	.117	4.19	.943	4.10	.933	.094
2. 数理的処理能力	3.988	963.8	.000	3.59	1.152	3.31	1.035	.277
3. 課題発見力	2.697	1000	.007	4.23	.889	4.07	.908	.155
4. リーダーシップ	1.856	999	.064	4.06	1.015	3.94	.964	.118
5. 語学力	-3.028	972.2	.003	3.56	1.212	3.78	1.062	-.219
6. 文章力	-1.427	982.7	.154	3.95	1.002	4.03	.842	-.083
7. 一人で困難に立ち向かう経験	-2.992	998	.003	3.97	1.040	4.16	.903	-.188
8. 社会に貢献する力	-1.589	1000	.112	4.19	.918	4.28	.833	-.090
9. 企業研究	-3.334	972.1	.001	3.56	1.128	3.78	.985	-.223
10. 他流試合	-1.213	980.9	.225	3.10	1.399	3.20	1.180	-.099
Q2. 方法認知合計（10点満点）	2.011	1002	.045	6.24	2.554	5.91	2.559	.328

表9 4年生と3年生におけるQ2平均値の比較

	t 値	自由度	有意確率 (両側)	13/14年度生 平均値	13/14年度生 SD	15年度生 平均値	15年度生 SD	平均値の差
1. 論理的思考力	-.928	990	.354	4.12	.965	4.17	.937	-.058
2. 数理的処理能力	-.959	987	.338	3.43	1.084	3.50	1.128	-.071
3. 課題発見力	1.444	990	.149	4.21	.867	4.13	.931	.087
4. リーダーシップ	-.261	989	.795	4.00	1.003	4.01	.983	-.017
5. 語学力	-3.953	988	.000	3.47	1.138	3.77	1.156	-.300
6. 文章力	-2.640	710.0	.008	3.88	.969	4.05	.915	-.166
7. 一人で困難に立ち向かう経験	-.828	988	.408	4.01	1.000	4.07	.990	-.054
8. 社会に貢献する力	-.734	990	.463	4.21	.887	4.25	.877	-.043
9. 企業研究	-1.146	989	.252	3.61	1.059	3.69	1.078	-.081
10. 他流試合	-2.059	988	.040	3.03	1.359	3.21	1.272	-.177

表10 学部とQ2の平均値と標準偏差

		1論理的思考 力	2数理的処理 能力	3課題発見力	4リーダー シップ	5語学力	6文章力	7一人で困難 に立ち向か う経験	8社会に貢献 する力	9企業研究	10他流試合
1. 経済学部	度数	178	178	178	178	178	178	178	178	178	178
	平均値	4.26	3.68	4.06	4.17	3.94	4.20	4.03	4.19	3.76	3.32
	標準偏差	0.89	1.13	1.00	0.90	1.19	0.85	1.09	0.94	1.13	1.19
2. 経営学部	度数	104	103	104	104	104	104	104	104	104	104
	平均値	3.83	3.06	4.15	4.14	3.37	3.77	4.07	4.29	3.78	3.04
	標準偏差	1.08	1.20	0.96	0.95	1.11	0.99	0.96	0.93	0.99	1.49
3. 法学部	度数	172	172	172	172	172	172	172	172	172	172
	平均値	4.24	3.51	4.29	3.92	3.71	3.98	4.04	4.35	3.66	3.19
	標準偏差	0.89	1.19	0.81	1.06	1.26	1.06	0.99	0.81	1.03	1.37
5. 教育学部	度数	264	262	264	264	264	263	263	264	264	263
	平均値	3.94	3.10	4.05	4.01	3.58	4.04	4.13	4.23	3.55	3.18
	標準偏差	1.00	1.04	0.93	1.03	1.10	0.87	0.93	0.86	1.11	1.24
6. 国際教養学部	度数	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54
	平均値	4.48	3.76	4.33	3.93	4.24	4.20	4.44	4.33	3.76	3.30
	標準偏差	0.67	0.85	0.78	0.99	0.87	0.79	0.79	0.87	1.18	1.33
7. 理工学部	度数	233	233	233	232	231	232	232	233	232	232
	平均値	4.31	3.82	4.22	3.90	3.47	3.82	3.85	4.12	3.60	2.94
	標準偏差	0.88	0.98	0.86	0.99	1.11	0.94	1.03	0.90	1.03	1.34
合計	度数	1005	1002	1005	1004	1003	1003	1003	1005	1004	1003
	平均値	4.15	3.47	4.16	4.01	3.66	3.99	4.04	4.23	3.65	3.14
	標準偏差	0.95	1.12	0.91	1.00	1.16	0.94	1.00	0.88	1.08	1.31

均値4.48、全体平均値4.15)、「2. 数理的処理能力」は理工学部(平均値3.82、全体平均値3.47)、「3. 課題発見力」は国際教養学部(平均値4.33、全体平均値4.16)、「4. リーダーシップ」は経済学部(平均値4.17、全体平均値4.01)、「5. 語学力」は国際教養学部(平均値4.24、全体平均値3.66)、「6. 文章力」は経済学部と国際教養学部(平均値4.20、全体平均値3.99)、「7. 一人で困難に立ち向かう経験」は国際教養学部(平均値4.44、全体平均値4.04)、「8. 社会に貢献する力」は法学部(平均値4.35、全体平均値4.23)、「9. 企業研究」は経営学部(平均値3.78、全体平均値3.65)、「10. 他流試合」は経済学部(平均値3.32、全体平均値3.14)である。各スキルに対する重要視する程度に学部(教育)の「個性」が現れているようで、企業が期待するスキル・能力ということもあり、教育学部はどの項目でも低めになっている。

なお、学部ごとの比較において、各スキル・能力の修得方法の認知について確認したところ、いくつかの学部の特徴が見られた(表11)。たとえば、経営学部を例にあげれば、「3. 課題発見力」、「4. リーダーシップ」、「6. 文章力」、「9. 企業研究」、「10. 他流試合」の方法をよく知っている学生が他学部と比較して多い反面、「1. 論理的思考力」の高め方に関してはわからないとの回答の割合が他学部よりも多くなっていた。また、国際教養学部の学生では、「1. 論理的思考力」、「5. 語学力」、「7. 一人で立ち向かう」の項目が他学部に比べて方法認知の割合が高かった一方で(とりわけ、語学力に関しては全員が高め方を知っていると回答)、「9. 企業研究」の項目においてわからないとの回答が他学部よりも高くなっていた。

表11 修得方法の認知（割合）と学部

1. 論理的思考力__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	100	69	169
	59. 2%	40. 8%	100. 0%
2. 経営学部	49	53	102
	48. 0%	52. 0%	100. 0%
3. 法学部	108	60	168
	64. 3%	35. 7%	100. 0%
5. 教育学部	149	111	260
	57. 3%	42. 7%	100. 0%
6. 国際教養学部	39	12	51
	76. 5%	23. 5%	100. 0%
7. 理工学部	141	89	230
	61. 3%	38. 7%	100. 0%
合計	586	394	980
	59. 8%	40. 2%	100. 0%
2. 数理的処理能力__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	98	71	169
	58. 0%	42. 0%	100. 0%
2. 経営学部	52	50	102
	51. 0%	49. 0%	100. 0%
3. 法学部	104	65	169
	61. 5%	38. 5%	100. 0%
5. 教育学部	108	152	260
	41. 5%	58. 5%	100. 0%
6. 国際教養学部	33	18	51
	64. 7%	35. 3%	100. 0%
7. 理工学部	157	74	231
	68. 0%	32. 0%	100. 0%
合計	552	430	982
	56. 2%	43. 8%	100. 0%
3. 課題発見力__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	83	87	170
	48. 8%	51. 2%	100. 0%
2. 経営学部	67	34	101
	66. 3%	33. 7%	100. 0%
3. 法学部	96	71	167
	57. 5%	42. 5%	100. 0%
5. 教育学部	152	107	259
	58. 7%	41. 3%	100. 0%
6. 国際教養学部	28	23	51
	54. 9%	45. 1%	100. 0%
7. 理工学部	119	112	231
	51. 5%	48. 5%	100. 0%
合計	545	434	979
	55. 7%	44. 3%	100. 0%
4. リーダーシップ__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	117	52	169
	69. 2%	30. 8%	100. 0%
2. 経営学部	84	16	100
	84. 0%	16. 0%	100. 0%
3. 法学部	100	70	170
	58. 8%	41. 2%	100. 0%
5. 教育学部	179	81	260
	68. 8%	31. 2%	100. 0%
6. 国際教養学部	30	21	51
	58. 8%	41. 2%	100. 0%
7. 理工学部	152	78	230
	66. 1%	33. 9%	100. 0%
合計	662	318	980
	67. 6%	32. 4%	100. 0%
5. 語学力__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	145	24	169
	85. 8%	14. 2%	100. 0%
2. 経営学部	84	16	100
	84. 0%	16. 0%	100. 0%
3. 法学部	152	17	169
	89. 9%	10. 1%	100. 0%
5. 教育学部	223	36	259
	86. 1%	13. 9%	100. 0%
6. 国際教養学部	51	0	51
	100. 0%	0. 0%	100. 0%
7. 理工学部	186	44	230
	80. 9%	19. 1%	100. 0%
合計	841	137	978
	86. 0%	14. 0%	100. 0%

6. 文章力__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	115	55	170
	67. 6%	32. 4%	100. 0%
2. 経営学部	78	23	101
	77. 2%	22. 8%	100. 0%
3. 法学部	127	41	168
	75. 6%	24. 4%	100. 0%
5. 教育学部	182	71	253
	71. 9%	28. 1%	100. 0%
6. 国際教養学部	37	14	51
	72. 5%	27. 5%	100. 0%
7. 理工学部	135	96	231
	58. 4%	41. 6%	100. 0%
合計	674	300	974
	69. 2%	30. 8%	100. 0%
7. 一人で困難に立ち向かう経験__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	118	52	170
	69. 4%	30. 6%	100. 0%
2. 経営学部	78	24	102
	76. 5%	23. 5%	100. 0%
3. 法学部	123	44	167
	73. 7%	26. 3%	100. 0%
5. 教育学部	187	72	259
	72. 2%	27. 8%	100. 0%
6. 国際教養学部	41	10	51
	80. 4%	19. 6%	100. 0%
7. 理工学部	150	80	230
	65. 2%	34. 8%	100. 0%
合計	697	282	979
	71. 2%	28. 8%	100. 0%
8. 社会に貢献する力__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	88	82	170
	51. 8%	48. 2%	100. 0%
2. 経営学部	72	27	99
	72. 7%	27. 3%	100. 0%
3. 法学部	109	59	168
	64. 9%	35. 1%	100. 0%
5. 教育学部	172	85	257
	66. 9%	33. 1%	100. 0%
6. 国際教養学部	29	22	51
	56. 9%	43. 1%	100. 0%
7. 理工学部	130	100	230
	56. 5%	43. 5%	100. 0%
合計	600	375	975
	61. 5%	38. 5%	100. 0%
9. 企業研究__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	84	84	168
	50. 0%	50. 0%	100. 0%
2. 経営学部	75	26	101
	74. 3%	25. 7%	100. 0%
3. 法学部	100	68	168
	59. 5%	40. 5%	100. 0%
5. 教育学部	123	134	257
	47. 9%	52. 1%	100. 0%
6. 国際教養学部	20	31	51
	39. 2%	60. 8%	100. 0%
7. 理工学部	132	99	231
	57. 1%	42. 9%	100. 0%
合計	534	442	976
	54. 7%	45. 3%	100. 0%
10. 他流試合__方法認知	はい	いいえ	合計
1. 経済学部	71	98	169
	42. 0%	58. 0%	100. 0%
2. 経営学部	53	49	102
	52. 0%	48. 0%	100. 0%
3. 法学部	83	85	168
	49. 4%	50. 6%	100. 0%
5. 教育学部	112	145	257
	43. 6%	56. 4%	100. 0%
6. 国際教養学部	22	29	51
	43. 1%	56. 9%	100. 0%
7. 理工学部	105	126	231
	45. 5%	54. 5%	100. 0%
合計	446	532	978
	45. 6%	54. 4%	100. 0%

4. 結びにかえて

今般、大学における教育の質保証が求められている。そこでひととき関心を集めているのが、学生のコンピテンシーあるいは汎用的能力伸長の測定・把握である。本学ではPROGを基にした就業力テストが実施されているが、抽象度が高く、自身の能力に関して実感がわきにくい。そこでRCWでは、自分自身が社会的に期待される行動をとれるかどうか、自己評価させている。

期待される行動については、いわゆる文系学生が就職した企業の人事担当者を中心にした聞き取りを基にしている。したがって、企業が理工系学生に期待する能力や態度とは異なるところがあるかもしれない。同様に、教職で求められる資質・能力ともズレがあるかもしれない。ただしかし、学部専門性に関わりなく企業就職する学生は一定数おり、そうした学生にとって、企業が求める能力や態度について意識してみることが有益であろう。

本稿では、6学部の3年生以上の学生を対象にRCWを実施することで、性別、学年、学部等を考慮しつつ分析を進め、本学学生のいくつかの特徴を明らかにした。素直に過ちを認め謝罪し、責任感をもって与えられた課題に取り組むまじめさは、広く本学学生の特長といえるかもしれない。一方、計画的・効率的に仕事に取り組み、明快に主張し、周囲を巻き込んで進む資質や能力については、相対的に自信がない学生が多いようである。

むろん大切なのは、さまざまなスキル・態度をすべて最大限に高めることなく、個々の学生の多様性、学部カリキュラムの特性に合わせて、学生一人ひとりが自覚的に自らの資質・能力を高めていくことである。そのような意味では、RCWの有益な使い方として、大学レベルでは就業力テストの結果も参照しつつ、学部

ごとの経年変化を確認することが有益なように思われる。学部レベルあるいはキャリアセンターとしては、あくまでも例示された項目に限られるが、その伸長に取り組めない学生の割合をモニタし、就職活動に向けたガイダンスを施すための参考資料として活用できそうである。また、結果を個人に戻し、学生自身が自らの強みや弱みを自覚し、改善に向けた取り組みを考えるきっかけにすることも重要であろう。そのためにも、結果を仲間と共有し、互いに気づきを述べ合うような機会づくりが有益であろう。

参考文献

AP推進本部(2017)「社会人として活躍する準備状況の自己点検票作成」『平成28年度大学教育再生加速プログラム(AP)報告書』pp.20-25. 創価大学教育・学習支援センター発刊